

新しい子供観に基づいた評価法に関する実践的研究

～ジャーナル及びポートフォリオアセスメントの効果について～

○澤野 覚 (SAWANO satoru) ・熊野善介 (KUMANO yoshisuke)

清水市立興津小学校 (静岡大学大学院) ・静岡大学

構成主義・アセスメント・ポートフォリオ・ジャーナル

1. 研究の目的

子どもたちの科学的概念理解の研究や、認知科学、科学哲学の研究の進展により、「構成主義」という概念が台頭するようになってきた。文部省より発行される指導資料や理科教育系の雑誌の中でも、構成主義的な考え方や構成主義に関する論文が見られるようになってきた。構成主義は、子どもに関する新たな捉え方の提唱とも言える。これを「新しい子ども観」と捉えたい。

本研究の目的は、新しい子供観とも言える構成主義が、日本の初等段階の理科教育にどのような影響を与えるのか、授業がどのように変わり、さらに評価がどのように変わるのかについて考察し、さらに、その考え方に基づいた新しい評価法の有効性について、実践を通して探っていくことにある。

2. 研究の方法

現在アメリカにおいては評価の概念が、従来までの「evaluation」から、「assessment」という概念へ移行しつつある。この背景には構成主義があるとされている。そこで本研究においてはまず、「evaluation」と「assessment」の概念の違い、さらにそこに構成主義がどのように関わっているのかについて考察する。新しい評価法については、アメリカで実践されている評価法の中で、ポートフォリオアセスメントとジャーナルを取り上げる。この二つの評価法が子供たちにどのような影響を与えるのか。子どもたちのどんな能力を評価できるのか、日本の教育システムにおいて実践する上での課題は何か等について発表する予定である。

今回の実践は、小学校5年生の児童を対象に行った。ジャーナル、ポートフォリオアセスメントのどちらも、長期的に実践することによって効果を期待できるものであるので、1学期を通して実践した上で、結果を検証した。学期始めと、学期終了時にアイオワ・アセスメントパッケージを用いて子供の変容を調査し、さらに比較・検討のため、ジャーナル・ポートフォリオアセスメントを実践していないクラスについても、同様の調査を行い有意義な結果が得られた。

これらの結果より、日本の理科教育においても上記のアセスメントは有効であることが分かった。さらにこれらのアセスメントを用いた実践が待たれる。

(参考文献)

熊野善介 (1996) 高度情報化社会における科学・技術・社会 (STS) 教育開発に関する実践研究 9-13・15-31.